

省軍陸說小

男一森竹

小説陸軍省

竹森一男

双葉社

〈著者略歴〉

竹森一男（たけもり かずお）

1910年北海道に生まれる。工業学校卒業後、大阪歩兵第8連隊に入営。除隊とともに陸軍省に勤務。勤務中に作家を志し、1934年処女作『少年の果実』が改造社文芸懸賞小説に入選。1938年陸軍省をやめ日華事変、太平洋戦争に従軍。復員後作家生活をつづけ現在に至る。著書に『レンバン島』ほか200冊。日本文芸家協会会員。日本児童文芸家協会評議員。東京作家クラブ委員。『文芸復興』同人。

小説 陸軍省

（検印廃止）

昭和46年1月1日 初版発行

550円

昭和46年3月1日 5版発行

著 者 竹 森 一 男

東京都東久留米市学園町2ノ4ノ8

発行者 瀬 川 雄 章

発行所 株式会社 双 葉 社

東京都新宿区神楽坂1の8

（郵便番号 162）

電話東京(268)5111(代表)

振替 東京 117299

印刷所 株式会社 享有堂印刷所

東京都新宿区市谷富久町108

製本所 株式会社 川島製本所

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします

0093—500007—7336

©竹森一男 1970

小説
陸軍省

装幀
秋野卓美

陸軍省雇員、乾三郎は課長室と呼ばれた。

「持ちまわりの書類だ。軍務局長室へ直接持って行ってくれ。閣下に直接、決裁してもらう」

「私が……」

怪訝な顔つきで乾三郎は、倉橋大佐の、浅黒い頬骨の張った武人らしい顔を見かえした。課長の眼尻には、いたずらっぽい微笑の皺が刻まれていた。

「私の課に、君のような変り種がいるということ……いや、私には鼻が高いんだ。昨夜、君の話が出てね。閣下が大へん興味をもたれた。どんな青年か、顔をみたいとおっしゃる」

「はあ……」

「閣下は案外文化人なんだよ。乾三郎参りました、と名のりをあげさえすればいい」

乾は顔をあからめ、書類をつかむと一礼して課長室をさがった。

「緊急軍事委員会召集に関する件通牒」と、タイプで打ち、かんぜよりで綴じた薄っぺらな書類には、持ちまわり特急の符箋が貼ってある。庶務から庶務の受付へ、通達簿で運ぶのではなく、青符箋の持ちまわり書類は、課長自身か、担任の将校が直接持って行くことになっていた。ただ、決裁を受けるだけの書類にしても、異例のことであった。

乾三郎は、下っ端の庶務係雇員であるが、最近一流の文芸雑誌に処女作を発表し、新進作家と

して、省内の人気者になっていたのである。

古びた板張りのガタビシする歩廊を一まがりすると、洗面所へ通じる廊下に出た。その奥から、うすみどりの事務服を着、むらさき地の単衣の裾さばきも颯爽と、タイピストの堀真紗美が歩いてきた。乾三郎は思わず歩度をゆるめた。

うしろでロール巻きにした艶のある豊かな黒髪は、ふんわりと左の耳をおおい、強く掻きあげて止めた右がわから、形はよいが薄く小さい耳が露われていた。耳から下のうなじは抜けるように白い雪の肌で、瞼のやや腫れぼったい目に、強い光がさしていた。鳩胸の姿勢で前方をみつめ、活発に歩く生き生きした顔に、青春の誇りと一種の驕慢さがかんじられた。

乾の勤める課の紅一点なのである。

「……」

乾三郎はすれちがう瞬間、ともに真紗美の顔をながめた。好意の微笑で反応をもとめたのだが、彼女はちょっと睫をふせただけだった。乾は呆然として真紗美のうしろ姿をふりかえってみた。それから強く首をふって苦笑をうかべ、おもいなおしたように階段をのぼっていった。

しかし、乾三郎は奇妙な胸さわぎをおぼえていた。それは不吉な予感といってもいいものだった。

乾はとくべつの関心をいだいて、堀真紗美に接しているわけではなかった。

乾は真紗美が初出勤した日から、いたわりの心と熱意をもって世話をやいたつもりであった。それについて、乾はとくべつの好意をもとめる気持などあるわけではない。普段、口をきく必要も

なかった。ただ、おなじ庶務のなかでも仕事の上で関係のふかい乾に、廊下で逢っても会釈ひとつしない態度が、ふしぎでならないのである。普通ではなかった。こんな新参タイピストがあるだろうか。

驕慢な性格とか、非常識な女とか言っではすまされない。乾は真紗美の或る異常をむねにたたまこんだ。局長室へ通じる階段へ足をかけようとしたとき、飄々とした粗末な背広姿の南波啓介が、長身のからだを折りまげる格好で、階段を降りてくるのに出逢った。

「よう、新進作家……」

表情のない浅黒い瘠せた顔に、ちらりとシニックな微笑を刻んで、南波のほうから声をかけた。

「いそがしそうだな。持ちまわりか」

「うん。軍務局長室だ」

「へ？ 将校なみだな。閣下はお客だぜ」

「ハンをもらうだけさ。大勢か」

「いや、兵務課長と憲兵隊長のふたりがいる」

「なんでも知ってやがる」

「おれの天職はスパイらしいや」

南波は変った男であった。父親は参謀本部の幕僚で、三人の兄弟はすべて軍人志願だが、彼だけは新聞記者になった。一年前から、陸軍省新聞班に奉職したのだが、天下の活火山たる陸軍省に身を投じ、その渦中にある情報を蒐め、げらげら笑いたいというのである。

陸軍の職員らしくなく油けのない長髪で、うすよごれただらしない格好で、颯々と省内を闊歩している。どこかに虚無的な翳があり、親しくしていながら、乾には南波の正体がよくわからなかった。

「乾君にだけは情報を洩らしてもいい。なんでもききに來いよ。なにしろ、作家だからな」

南波は顎のながい悲劇の哲学者シェストフみたいな顔つきで、乾にささやいた。

「閣下のところへ行ったら、盗みぎきして來いよ。三人で何を話しているかをね。おれには、だいたい想像がついているんだが……」

「そりゃ、むりだよ。君じゃあるまいし」

「え、おい、恋愛小説書いてる時期じゃないぜ」

南波にわかれて、乾は階段をのぼって行く。乾にも、興味がないわけではなかった。一見、平安をよそおっているが、陸軍部内の派閥争いは、底流に重苦しい危機感を孕ませていた。この緊急軍事委員会の召集に関する書類も、どのような重要事項が秘められているか、わかるものではなかった。ひたひたと押しよせる時代の波が、陸軍省を中心に渦巻き奔騰し、いつどこで爆発するか。そんなことを漠然と考えながら、乾はいつか軍務局長室の前に立っていた。

昭和十年八月十二日。——その日はむしむしした暑い日であった。冬は閉ざされている頑丈な扉は両がわにあげられ、胸の高さに開閉も軽い観音びらきの小扉がとり付けられてあった。その前で、

「閣下！ 倉橋大佐殿から急ぎの書類を持ってまいりました。乾三郎、まいりました。はいって

よくありますか」

乾は不動の姿勢のまま、大声で内部へ呼びかけた。

「おう……」

局長の濁声が応答した。

「乾三郎、はいりますす！」

永田軍務局長は壁を背に、シャツ一枚に乘馬ズボン、スリッパというくつろいだ軽装で、大机にむかっていた。さしむかいに山田兵務課長、新見憲兵隊長が、ひたいをあつめて書類をのぞきこんでいる。

乾は大股に近づき、山田課長のうしろからまわって、不動の姿勢をとった。書類をわたそうとしたが、永田は一瞥もあたえなかった。気迫のもりあがった顔に、炯々と光るまなざし。新見のさしだす書類のページをひらき、じっと黙読しているのであった。

机の一隅に、おなじガリ版刷りの書類が山積してある。乾は表紙の文字をちらりとみた。「真崎教育総監更迭事情要点」「肅軍に関する意見書」等の没収書類らしい。乾は南波からの情報で、十月事件に連坐して免官になった磯部、村中たちが怪文書を配布したことを知っていた。

これか——と息を呑んだが、いつまでも突っ立っているわけにはいかない。一步すすみ、口をひらきかけたとき、

「ちょっと待て」

それから、いらいらした表情で永田はうるさそうに顎をしゃくった。

「あとにしてくれ」

「はっ……」

内心、苦笑をうかべながら、乾ははじかれるように引きさがつた。局長は、作家の雇員など顔をみる余裕もなかったのである。

扉を背に一礼して、室外に出たとき、乾とすれちがいに、長靴の拍車をひびかせながら、この暑いのに夏マントを羽織り、トランクをさげた中年の将校が局長室へはいつて行った。廊下から、なんとなく覗きこむと、将校は扉のすぐ内がわへトランクをおき、せかせかとマントをぬいで、そのうえに掛けた。

・正装の軍服のむねに勲章がきらめき、赤い歩兵の襟章に2の金文字、肩章の階級は中佐であった。中佐は軍帽をぬぎ、軍力の鞘をおさえて威儀をただした。頬骨の突出した色の浅黒い丸顔で、ひきむすんだ薄いくちびるに短気らしい一徹な性格があらわれていた。

八月異動で、進級か栄転の申告だな、と乾はおもった。申告なら、閣下も受けるにちがいない。そのタイミングをみて、もう一度行ってみようと考え、廊下を往ったり来たりしながら、中佐の出てくるのを待った。

中佐は福山から台湾歩兵第二連隊へ赴任途上の相沢三郎であった。

相沢中佐は軍務局長室へはいると右手からまわりこみ、永田少将のまえでいきなり拔力したのである。無言であった。

思いがけぬ来客の拔刀に愕然と立ちあがった少将は、顔を恐怖でひきつらしながらも本能的に

刀架のほうへ手をのばした。その肩さきに相沢の刃が打ちおろされた。よろめくところをさらに一撃。

新見大佐は声にならぬ声をあげ、椅子をはねのけて、うしろから相沢の胴を抱きとめた。相沢は小柄な憲兵隊長をはねとばし、返す刀で斬りつけた。左上臍部に深手を負った新見は気をうしない、山田大佐は救いをもとめて室外へおどりでていった。

残されたのは永田と相沢の二人きりだった。天井の大扇風機が鈍く回転し、あけ放った窓のカーテンがかすかにゆらいでいた。永田はふしぎに冴えた断末魔の心に扇風機の鈍いうなりや、カーテンのゆらぎや自分の血でそまつた床に相沢の軍帽の赤い色や星章の金色を、あざやかに刻みつけていたのである。

相沢も永田も対峙しながら一言も発しなかった。しかし相沢が狭いひたいに汗を吹きだし、土色の薄いくちびるから獣のうめき声を発しながら、刀をもちかえたとき、永田は軍事課長室へ通じる扉口へ身をひるがえした。それより早く相沢は跳躍し、永田の背部を拝みうちに突きさした。

肉にくいいた軍刀のきっさきは、まるで大根を刺し貫いたように手ごたえがなかったので、相沢は勢いあまって左手がすべった。鐔のはずれたてのひらが刃にふれ、ざくりと血をふきだしたのに逆上し、柄頭をにぎった右手に力がいらなかった。こんどは、きっさきが抜けないのであった。

左手をそえて、やっと抜いたとき、デンガク刺しになった永田の白いシャツの背から、いきな

り鮮血が迸りでた。永田は同時に床のうえにつんのめったが、うめきながら刀架のほうへ匍って行く。相沢は、まだ生きていやがる、とまなじりを裂き、永田のコメカミを割った返す刀で、あおむけに倒れた瀕死の咽喉部へとどめをさした。

血刀のまま鞘におさめ、ゆうぜんと扉口のマントを羽織ると、トランクをさげて廊下へ出た。すでに人びとは室外に奔っていた。しかし、相沢のすがたをみると、さとうしろに退く。相沢の顔は紙のように蒼ざめ、人びとのあいだをゆうゆうと歩きながら、虚脱した眼は、なにものもみていないのであった。

「相沢中佐！ き、貴様は、なんということをしてくれた」

一人の大佐がまっすぐすすみよって、相沢の肩をたたいた。相沢は白痴のような無表情で、なにごともしなかったかのように呟いた。

「相沢は今夜台湾歩兵第二連隊へ発ちます」

乾三郎は書類を課長のところへもどすしかなかった。しっかりと階段をふみしめているはずなのに、ガクッと腰が抜けていまにもつんのめりそうであった。ショックはあまりに大きかった。

二

昭和十年の陸軍省――。

陸軍省は国会議事堂を背にした小高い台地に、参謀本部、陸地測量部の建物とならんでいた。

眼下に皇居があり切りたった石垣上の翠巒を映して、みどり色の濠がゆったりと白鳥をうかべているのが見えた。半蔵門に近い三宅坂の電停を降りると、正門があった。

霞が関の官庁街を皇居の右がわに見て、日比谷から銀座という東京の中心部を俯瞰できる陸軍省は、その位置が示すように軍国日本の威容を誇っていた。が、明治初年に建築した木造の二階建ての省内で、威厳と活気があふれているのは、正面玄関から大臣官房をとりかこむ鉄筋の一むねだけだった。ここには陸軍大臣室と豪華な大会議室があった。大会議室は議事堂なみの赤い絨氈が敷かれ、菊の紋章や金蒔絵の調度品がそなえつけられ、壁には歴代大臣のカラーの肖像写真が金ぶちの額にはめこまれて、ずらりと掲げられてあった。

広い内庭をかこんでコの字型に建った各局課の事務室は、どれもこれも七十坪くらいの部屋で、区別がつかぬくらい椅子や机の配列が似ていた。古びて煤けたような備品が人間とともにぎっしり詰ったかんじで、どこの役所とも共通した無味乾燥な沈滞した空気がよどんでいるのであった。

乾三郎の所属する軍務局の一課は、省内の中央部を占めていた。内庭に面した一階の部屋で、約八十名の役人が事務をとっていた。

出入口の廊下に面した窓ぎわから、六列のデスクが整然と延び、机と机の間を本棚で区切って、四名ないし五名のものが差しむかいに腰かけていた。この列は花壇や灌木の茂みがみえる南がわの窓近く、軍人席のそばまでつづいていた。乾三郎が常にこの配列の妙に苦笑するのは、いかに軍隊式だからである。

廊下に近い列の最左翼は、新参に決っていた。新入の雇員から古参順にならび、つぎに判任官、勅任官となる。列の最右翼は勤続二十年の老人で白髪禿頭の陸軍属一級俸と相場が決っていた。席順ひとつにも階級を厳然と示しているのだった。しかし、列の中央あたりに白髪頭が蠢いていた。これは何年勤めても無能のため任官できない雇員の飼い殺しか、生き字引として停年後嘱託で勤めている臨時雇員ないし傭人の老人であった。いずれにせよ階級は、そっくりそのまま俸給の額に比例した。

給仕の傭人はべつとして、雇員から属官（判任官）まで、二十歳から六十歳くらいまでの背広族が働いているのだが、二十代の青年はかぞえるほどしかなかった。ほとんど四十歳が平均年齢といっている。そのためか、いかにも融通のきかない特務曹長あがりの退役軍人か、近代的な会社では太刀うちができないといった中年の落伍者か、どこか田舎の役場から脱落してきたような固い殻をかぶった役人タイプが多かった。そのせいか部屋の中は、生産的な会社のオフィスにみられる発刺さや活力が感じられず、いかにも精気のない沈滞した灰色の薄濁った空気がただよっているのだった。

しかし、これは雇員や属官の前歴や無能のせいだけではなく、陸軍省独自のしくみがそうになっているからだ、と乾三郎はみていた。その証拠に、おなじ部屋にいながら、庭の植込みに光りが満ち風通しのよい窓ぎわに一人ずつ悠然と縦隊にならんでいる軍人席は、服装も顔かたちも態度もまったくがっていた。

すべて淡緑と橙の色をまぜたようなリユウとした軍服を着こみ、星章がいやにピカピカ光る金

色燦然の肩章をつけているからだ。課には課員（属官、雇員は課員でなかった）が八名いたが、いずれも庶務課員の大尉ひとりを除いては佐官であった。すべて、堂々たる体格の持主で血色がよく、あぶらののった若々しい艶のある顔から、おかし難い誇りとともに精悍なみずみずしいほどの気迫がたちのぼっていた。課長室に近い東端の最右翼は高級将校の中佐で、さしむかいの席の若い大尉のほかは、六人とも少佐であった。

これらの将校は、いずれも陸軍士官学校出の秀才といわれていたが、なかにはテンボウセン（佩用の徽章が天保銭に似ているために俗に称ばれた陸軍大学出身将校）もまじっていた。若くして陸軍本省勤務を命ぜられたものは、出世街道を約束された幸運児といっている。かれらの得意さは、旭日昇天の意欲にみちて表面にあらわれずにはいない。事実、軍務局課員ともなれば、それだけの実権があたえられ、いまや全軍の動脈となりながら、榮進と昇進は眼のまえにぶらさがっているからであった。

たとえば、連隊とか旅団司令部あたりから本省へ榮転してきた大尉は、一年もたたぬうちに少佐に進級する。三十かそこらで佐官になった大尉は、佐官らしい貫禄を身につけるためにあわてて美髭をたくわえる。すると、いつのまにかどこかの連隊の大隊長になって、はばたいていくのだった。三、四年もして、あまり俸給のあがらぬ背広族が、ほとんど変化のない役所勤めをくりかえして、新任少佐のことをすっかりわすれているころに、忽然として陸軍省へ舞いもどってくる。そのとき、もとの大尉は金筋四本に星三つくらいになっていて、みちがえるように太って立派になり、逞しい髭を撫でながら、鷹揚に課長室におさまるといふあんばいだった。

陸軍省付の將校が躍進期の動亂をはらんだ陸軍において、病氣でもしないかぎり、閣下に昇進することはゆめではなく、全軍の指揮をとる日も妄想ではない。乾は、とくべつ意地のわるいみかたをしているわけではなかった。が、少佐らしくなるために美髯をたくわえると、いつのまにかそれらしくなっている。つまり肩章と勲章が突然昇格することによって、それらしい貫禄ができ、内面的にも変貌していく状態がおかしかった。その点、昇格が緩慢な背広族は、何年経っても、きわだった変貌はみられなかった。

陸軍省に勤めている以上、俸給内のつましやかな小市民的な生活を持続することのほかに、なんらの未来もないからである。かれら背広族がほっとした表情をうかべ、自由な気持でさざめきあい、ときに陰気な部屋の一隅から笑声がおこるような場合は、課員が席をはずしたときであった。將校が全員会議へ出かけたあとか、早退けでもしないかぎり、決して笑声の洩れるようなことはなかった。それは終始、息づまるような気持で、軍服に頭をおさえつけられているからであった。

かれらは早くて二、三年、普通五、六年雇員を勤めあげると、成績のよいものから判任官に任官した。陸軍省属判任官何級俸、という辞令をうけると、あとは年功序列で昇級していく。二十年間勤めあげると恩給がついたが、成績次第によっては高等官何等という昇進も約束された。が、この幸運にめぐまれるものは百人の判任官中一人の割といってもいい。まさに狭き門であった。もし、事務官の金的を射とめたとしても、ここでは軍人の上に位いすることはぜったい出来ない。もちろん、軍人以上の俸給をのぞむことは全く不可能だった。